

## 《Brigade》の運命について

江 口 修

筆者はフランスでフィロロジの正式な訓練を受けたこともなく、ましてや歴史言語学についてはまったくの門外漢でしかない。したがって本小論の試みは盲へびに怖じずの愚行になる恐れがおおいにあるが、グージュネムの『十六世紀フランス語文法入門』<sup>(1)</sup>を手がかりにフランスルネサンス詩を読み始めた者としては、類書を手がかりに遠国の日本人読者が勝手な思い入れで解釈してはいないかを常に検証して行くことは当然の責務であり、個人的備忘録のとどめるべきでないとは判断されるときは積極的に公表し大方の批判を仰ぐのが適当であると考えてる。

さて今回はいわゆるイタリアからの輸入語 (mots empruntés à l'italien) の一つ《brigade》を取り上げてみよう。あまり注目されていないことも知れないが、日本語訳においてこの語は問題をはらんでしまうからである。たとえば高田勇訳では、

それ、「<sup>ブリガード</sup>部隊」の声が聞こえるぞ、

陽気な仲間の

<sup>オーバード</sup>黎明楽が聞こえるぞ、

---

(1) Georges GOUGENHEIM, *Grammaire de la langue française du 16<sup>e</sup> siècle*, Paris, Edition Picard, 1974. 余談ではあるが、GOUGENHEIMの発音については常々悩まされてきた。グージュネムが慣例となっているようであるが、先日松原秀一先生の『フランスことば事典』(講談社学術文庫, 1996年)を読んでみると、およそ5ページほどの間において、「グージュネム」と「グージュネム」とのふたつの表記が使用されていることに気がついた。もちろん同一人物についてのことである。本小論では「グージュネム」と折衷的にも思われる慣用表記を採用したが、もちろん私人学者に参考意見を求めた上のことである。

ぼくらを目覚めさせようと吹き鳴らし  
 響かせてるぞ  
 彼らのうつろな芦笛を。<sup>(2)</sup>

もちろん訳注にも指摘されておられるとおり、「部隊」とはプレイヤード派の前身であるコクレの学寮に集まった詩人たちのことである。たしかに清新の気概溢れる詩人たちを「部隊」と呼ぶのに異論をはさむつもりはまったくないのではあるが、当時の《brigade》という語がフランス語として持っていたコノテーションと日本語の「部隊」が持つそれとの間に齟齬は生じてはいないかとなると、若干の検討が必要になると思われる。訳注の背景には P. ローマニエ校注によるクロード・ビネ『ロンサールの生涯』<sup>(3)</sup>に付せられた「歴史的注解と考証」があるのだが、本論が扱う問題のまさに焦点となっているので、確認の意味もこめて当該部分を紹介しておこう。

Brigade という語はプレイヤードという語よりは戦いを想起させると同時により通俗的であるが、16 世紀後半には広く用いられており、とくに 1549 年以降はロンサールとその好敵手たちのグループを示すのに用いられた。しかるに、エヴァーズ嬢はこの点についてシャマルに異を唱え、*brigade* という語が常に普通名詞として用いられており、とりわけロンサールやそのコクレ学寮の同輩そして文学仲間を示すために特別な

(2) 高田勇訳、『ロンサール詩集』(1985 年, 青土社), 頁 55. 原詩は以下のとおりである。

Io, j'entens la brigade,  
 J'oy l'aubade

De nos compaigns enjouez... (P. de Ronsard, *Les Bacchanales, Oeuvres complète* par P. Laumonier, S.T.F.M., t. III., pp. 184-185. 以下ロンサールに関する引用はこの版による。ローマ数字は巻を示す。

(3) Claude BINET, *La Vie de P. de Ronsard* (1586), ed. historique et critique avec introduction et commentaire par Paul Laumonier, Genève, Slatkine Reprints, 1969

(distinctif) 名詞として用いられたことはないと結論している。筆者(ローモニエ)はこの意見に全面的に組することはできない。たしかにウヴェール嬢が挙げる引用の大部分では、(中略) そのとおりである。<sup>(4)</sup>

このあと「しかしなによりも彼女も引いている次の二例」として先に上げた引用と、同じ『バッカス祭』にある、

いざ、<sup>オーバード</sup>黎明楽で導け、  
「<sup>フリガード</sup>部隊」を

おお、きみら、名誉ある歌人よ<sup>(5)</sup>

を取り上げ、「本質的に同嬢が主張しようとするのとは逆のことを証明しているように思われる、なぜなら *brigade* という語はここでは完全にロンサールと『仲間の楽しいグループ』だけを指すために用いられているからである」<sup>(6)</sup>と反論している。その後続く議論の展開についてはあとで触れることにして、この議論について資すると思われる新旧の研究や資料について見ておく必要があるだろう。

まず念のためにユゲの『16世紀フランス語辞典』<sup>(7)</sup>をひもとくと、単に「人々の集まり、グループ(軍事的意味はない)」(下線筆者)との記述のあと多数の引用が、人、動物、物に分けられて続いている。ローモニエとエヴァーズ嬢の論戦が、いずれも1905年に出版されたビネの『ロンサールの生涯』に関する校訂版と博士論文を舞台にしていることから、実際にはその数年前に始まっていたことが推測されるだろう。ユゲの辞書は1925年刊行であるか

(4) 同上, p. 222.

(5) 前掲書, p. 67 およびIII, p. 208.

(6) 前掲書.

(7) Edmond HUGUET, *Dictionnaire de la langue française du seizième siècle*, Paris, Didier, 1925,

ら、当然のことながらローモニエの見解は知っていたはずである。それをきわめて卒然と「軍事的意味はない」と記して終わっていることは、少なくともこの語についてユゲは反ローモニエの立場に立っていたと考えたくなる誘惑に駆られる。もちろんただちに16世紀のフランス語語彙の混乱期の膨大な泡沫語の海を相手にしていたユゲにそこまで意識的な対応を見て取ることは無意味だとの反論が寄せられるだろう。また、現代の読者にとって《brigade》はまさに軍事用語の典型であり、手許にあるユニヴェルサル百科事典を開いてみるだけで<sup>(8)</sup>、近世以後この語が厳密な軍事専門語として意味内容を微妙に変えながら生き延びてきたことが看取される。つまり本来の意味を完全に喪失してしまった《brigade》を現代の読者は簡単に軍事的な意味で解釈する恐れがある、したがって「軍事的意味はない」との記述はそういった読者に対する単なる注意の喚起ということも考えられるだろう。

ではそれ以前の論考ではどうなっていたのだろうか。当然マルティー=ラヴォーの名が想起される。19世紀における16世紀の記念碑的研究であるアンソロジー『フランスプレイヤード派』の補遺2巻においてマルティー=ラヴォーは初めてと言ってよいフィロロジカルな研究を集大成している。だが《brigade》に関するその記述は意外とあっけない。16世紀におけるイタリア語とスペイン語からの借用についてラヴォーは次のように総括している。

プレイヤード派の詩人たちはイタリア語からの借用についてはかなり慎重な対応を見せている。イタリア語をフランス語に導入したのははつきりとした意図があつてのことではなく、ペトラルカを模倣するためというのがそのきっかけであり、ほとんど無意識的な癖として範と仰ぐ詩

(8) *Encyclopaedia Universalis*, CD-ROM版を使用し本文検索で《brigade》を検索したところ Armée の項目でもっとも多くヒットを得た。ちなみに Pléiade の項目にも当然のことながらヒットがあったが、la brigade du Coqueret という予想通りの表現で、軍隊用語としての意味が込められているように思われるが断定はしかねる。

人の表現を利用したのである。

彼らは何度となくそしてかなり熱心にイタリアから借用した軍事用語を非難しているが、イタリアの軍事用語は急速に浸透していった。<sup>(9)</sup>

その後の歴史的推移を見る限りでは《brigade》と言う語の運命を言い当てているようだが、ドラからの引用だけで済ませているのは釈然としない。たしかに「イタリア系の軍事用語排斥の火蓋を切ったのはデュ・ベレーである」<sup>(10)</sup>とするマルティー・ラヴォーを弁護するかのようになり、デュ・ベレーは《brigade》をまったく使用していない。だがこうしたいわゆる大先達の見解というのは多かれ少なかれ影響力を持つため、思わぬ躰きの石となりかねない。なぜなら《brigade》は16世紀に初めてフランス語に導入された語ではないからである。リトレとゴッドフロワの辞書<sup>(11)</sup>を読めばこの語はすでに中世末期に登場していることが分かる。今日われわれの手許にはフランス語辞典の最高峰である *Trésor*<sup>(12)</sup> と最新のロベール『フランス語語源辞典』<sup>(13)</sup> がある。*Trésor* の語源と語史の項を紹介しておく。「イタリア語 brigata 《troupe, bande》の借用で、集団とか仲間という意味では13世紀での使用が確認されている。軍事用語としての意味では14世紀から。イタリア語 brigata は《bande, compagnie》の意味での *briga* の派生語である。」ロベールの『語源辞典』の記載もほぼ異同がなく、さらに16世紀の流行として「今日プレイヤーの名で知られている詩人たちのグループに付けられた名」と記されている。われわれとしては当惑を禁じ得ない、ユグは間違っていたのだろうか。辞書以外にも参照を求めてみよう。

(9) MARTY-LAVEAUX, deux vols d'Appendice à *La Pleiade française*, Paris, Lemerre, 1866-1898, tome 1, p. 178.

(10) 同上。

(11) Emile LITTLE, *Dictionnaire de la langue française* (1862-1873); G.: F. GODEFROY, *Dictionnaire de l'ancienne langue française* (1880-1902).

(12) *Trésor de la langue française*, tome 1-12, CNRS, 1971-1987

(13) Le Robert, *Dictionnaire historique de la langue française*, 1992.

ユゲは晩年フランス語史をまとめたものを2点著しているが、そのうちのひとつ『語の意味の変遷』でふたたび《brigade》を取り上げている。頑なまでというかやはり「Brigadeはイタリア語 brigata の借用であり、この語は〈人々の集まりとか、群れ〉を表わしていて、いささかも軍事用語としての意味は持っていない。レミ・ペローは《徳と神たちの一団》と、そしてアンリ・エチエンヌは《術学者の群れ》として用いている。(中略) もちろん *brigade* という語は兵士の一団を意味することもあった。だがそれに特化するようになったのは18世紀末のことである」(下線筆者)<sup>(14)</sup> その説を曲げようとはしていない。だがその引用は最新のフィロロジの成果に異を唱えようとしているようにも思われる。

幸いなことにというべきかどうかは判断が難しいところではあるが、もう一点参照すべき研究を紹介しておきたい。題名もまさに『16世紀フランス語に導入されたイタリア語』であり、本文をそのまま訳出しておく。

Brigade, 〈グループ〉という意味でイタリア語から14および15世紀にイタリア語から借用され、文例は多数にのぼる。「部隊」(軍事用語として) という意味がここから派生したかどうか、あるいはこの新たな意味を伴ってイタリア語から再借用(R. Estienne, 1549)年されたのかどうか微妙なところである。フロリオはふたつの意味を同時に受容したのではないかと言及しているし、ボッカチオはすでに「部隊」としての brigata を知っていた。フランスでもH. エチエンヌはこの語をフランス語源なのだが、イタリア経由で軍事用語としてフランス語に戻ってきたものとして取り上げている。フランス語源というのはまったくの誤りであるとはいえ、この語はフランス語でも新しいものではなかったために、エチエンヌはフランス出自の語と考えたのであろう。最初の実例はノエ

(14) Edmond HUGUET, *L'évolution du sens des mots*. Genève, Librairie Droz, 1967, pp. 17-18.

ル・ド・ファイユの *Entrapel*, I, 105, ドラ, 23, 53 (M.-Lav.), そしてドービニエ, III, 308, IV, 225 である。<sup>(15)</sup>

おそらくこのウィントの指摘が実相に一番近いのではないだろうか、参照に足る辞書もなくアカデミーも存在しない16世紀にあつては、その正確な来歴など知らないままにひとつの言葉にさまざまなコノテーションが担われ、さまざまな泡沫語が風によって飛んで行く言語の海原に放り出されることはままあつたに違いない。現代では軍事用語として特化した《brigade》とロンサルたちが採用したときの《brigade》との間にはどれほどのずれがあるのだろうか。最後にロンサルの詩に実例を求めて、当時この語が負ったコノテーションの一端でも明らかにしておこう。

おー、おー、この<sup>ブリガード</sup>連中が  
 浮かれ騒ぎでわたしに合図を送る  
 おまえのくびきに繋がれよ  
 牡山羊をけしかけるのを手伝うために。<sup>(16)</sup>

初期の作品で、あえて「連中」と訳をあててみたが、ここではローモニエの脚注を待つまでもなく、高田訳の「部隊」と意味するところは変らない。しかしやはり日本語でも「部隊」は軍事用語であり比喩として用いるとしてもかなりのバイアスがかからざるえないように思われる。結局は選択の問題でしかないのだが、原語のコノテーション構造が不分明な場合はつねに不満が残ってしまうことになる。われわれとしては《ブリガード》と《オーバード》の押韻の妙というか、この押韻が清新の息吹と前進する気概を見事に合

(15) Bartina Harmina WIND, *Les mots italiens introduits en français au XVI<sup>e</sup> siècle*, Utrecht, Hespublishers, 1973, pp. 63-64.

(16) V, p. 62.

致させえたがゆえに、《brigade》はプレイヤード派の前身およびプレイヤード派の詩人たちの呼称となつたのではないだろうか。やはりユゲのように軍事的コノテーションを認めないというのはこの語の持ち得たであろう含意の広がりやを狭めて解釈してしまうことになってしまうだろう。その他

饒舌なイアソンとその部隊<sup>フリガード</sup>は  
 ポュックスの首に思いっきり抱き付き  
 そしてその兄カストールは手ずから  
 脇腹をえぐり……<sup>(17)</sup>

ここでは歴史叙事詩の試みとして軍事色をあえて出してみた。この讃歌のすぐ近くにローモニエが1553年のプレイヤード派の構成を知る手がかりとなるとしている一節がある。

ベローよお前が第七のプレイヤードの星となるべく  
 この良き仲間<sup>フリガード</sup>たちに加わりに来たる姿を認めて<sup>(18)</sup>

やはりロンサールにおいては《brigade》は強い意志に導かれる結束の固い「同士」とでもいった意味を中心にあるようである。それが軍隊で用いられるかそうでないかにはあまり拘泥していないようだ。しかし翻訳あるいは研究上あえて訳語を当てる必要が生じたときこのロンサールの《brigade》が持つ含意をカバーできる日本語を見つけることはかなり困難なようである。ユゲの固執が引き起こした16世紀のフランス語をめぐる一論考もこの辺で閉じることしよう。

(17) VIII, p. 318.

(18) 同上, p. 354.